

世界の“レジェンド”キルイに、世界のトップを目指すテフェリ、ギザエが挑戦

新しくなった FUKUOKA にも歴戦のランナーが出場する。その筆頭がアベル・キルイ（ケニア・40）で、09年・11年と世界陸上は2連勝した選手。12年ロンドン五輪も銀メダルと、世界のトップシーンを走ってきた。マル・テフェリ（イスラエル・30）は30歳になったが今年2時間06分58秒の自己新、世界陸上オレゴンでも11位と成長が著しい。マイケル・ギザエ（スズキ・28）は昨年の福岡優勝者。世界のレジェンドとそれに挑戦する2人が、12月2日の会見で FUKUOKA への思いを語った。

●キルイの目標とする「2時間6分」の価値

キルイは会見で「80%の準備ができています。2時間6分あたりになると思う」と自身のフィニッシュタイムを予測した。2時間6分あたりなら自己3番目のタイムになるが、その部分の価値を少し詳しく紹介したい。

キルイの世界陸上と五輪出場は09～12年の3大会で、その間に2度の世界陸上優勝と五輪銀メダル。輝かしい戦績を誇るが、トップレベルを長く維持していることも特徴だ。

自己記録は2時間05分04秒（09年）で、その11年後にセカンド記録の2時間05分05秒（20年）を出している。厳密には調べきれないが、世界でも極めて珍しい例だろう。07年に前述の2時間06分51秒をマークし、今年も2時間07分25秒。これだけ長く世界レベルのタイムを出し続けられる理由は何なのか？

「何よりも規律を重んじてきたからです。コーチの立てる練習メニュー、食事、睡眠、マッサージなど、すべてに規律を持つことが長年、結果を出すことにつながっています」

会見に出席したテフェリも「キルイという偉大な選手と走る機会を生かしたい」と敬意を込めて話した。

キルイは今年6月で40歳になり、最初のマラソンが FUKUOKA となる。40歳が2時間6分前後で走れば世界の注目を集める。

「私が勝てればいいが、誰が勝っても楽しいレースができればいいですね」

コメントにも、世界で15年以上戦い続けてきた余裕が感じられた。

●イスラエル記録更新を目指すテフェリ

テフェリは「（自身が持つ）イスラエル記録の2時間06分58秒を破ること」と目標タイムを明確に話した。「天候やペースメーカーの走りにもよりますが、風がなければ更新したい。エチオピアの標高3000mの場所で練習を積んできました。FUKUOKA で優勝したい」と意気込む。

生まれはエチオピアで、14歳のときに家族とともにイスラエルに移住した。イスラエルの学校を卒業し、軍役も果たした後に、「プロアスリート」になった。12年以降の国際大会にイスラエル代表として出場している。

マラソンでは16年リオ五輪73位、17年世界陸上途中棄権と結果を残せなかったが、18年ヨーロッパ選手権に2時間13分00秒のイスラエル記録で7位に入賞。19年に2時間8分台、20年に2時間7分台と成長し、今年2時間6分台に入った。21年東京五輪13位、今年の世界陸上は11位、ヨーロッパ選手権2位と、代表としての実績も上昇中だ。

「30kmまではキルイに付いて行くことになります。30km以降はお互いにチャレンジングな走りになると思う」

尊敬するレジェンドに真っ向勝負を挑む。

●“福岡”と関わりが深いギザエ

昨年優勝者のギザエは目標タイムを、「2時間07分51秒の自己記録更新です。天候が良ければ2時間6分台も出せると思う」と会見で話した。ギザエはケニア出身で、日本で成長した選手。そして“福岡”との関わりが深い。

高校は福岡第一高で、スズキ入社1年目の15年福岡国際をペースメーカーとして走った。16年、17年と同大会で徐々に記録を伸ばし、18年びわ湖で2時間09分21秒と初のサブテンを達成。19年福岡国際は5位、20年には2時間08分17秒の自己新で4位とレベルアップを見せた。そして昨年ついに2時間07分51秒で優勝を飾った。

「福岡国際マラソンの歴史に名前を刻むことができてうれしいです。ケニアから来日して福岡第一高、スズキで走ってきた歴史として残るんです」と喜びを表現した。

今年は昨年よりもトレーニングが充実していた。「主に持久力が向上しています。期待通りの結果を出せるのでは」と手応え十分だ。

今年は母校の福岡大一高が初めて、福岡県代表として全国高校駅伝に出場する。「ニュースを聞いてうれしかったです。先生にもお祝いの電話を入れました」

そしてもちろん、自身も「タイトルを守りたい」とFUKUOKAに臨む。

「昨年、福岡は最後になると聞いて悲しい思いをしましたが、新しい福岡が再び誕生しました。幸せな気持ちになりました。世界チャンピオン（キルイ）も一緒のレースです。協力して走って、コンディションが良ければ連覇を狙います」

外国勢の新生FUKUOKAに懸ける思いも、今大会になくってはならないものになる。